楽劇『パルジファル』における
中世文学の再構成

安　藤　秀　國

1．導　　入

ヴァーグナーは、ゲルマン神話に依拠した壮大な四部作『ニーベルングの指環』を経て、「舞台神聖祝祭劇（Bühnenweihfestspiel）」と銘打った楽劇『パルジファル』[1)] において、再び中世伝説を取り上げる。作曲者の「白鳥の歌」となったこの楽劇の直接の題材は、言うまでもなく中世の叙事詩人ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』である。更に遡って、この叙事詩の手本となっているのが、「聖杯」を史上初めて文学的に形象化したクレチアンの『ペルスヴァル』である。本稿では、中世文学の原典の構成と比較・分析することによって、ヴァーグナーの楽劇の特質の一端を解明する[2)]。

ヴォルラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』は、中世ヨー

1）楽劇『パルジファル』は、以下の文献を使用し、「PA」と略記し、引用頁を数字で示す。以下、本稿では他の文献についても、同様の形で、出典と引用頁を示す。

Richard Wagner: Parsifal. Einführung und Kommentar von Kurt Pahlen unter Mitarbeit von Rosmarie König. Mainz: Schott 2010.

なお、日本ワーグナー協会による対訳注解書もある。

ワーグナー『パルジファル』三宅幸夫・池上純一編訳、白水社、2000年。以下「協会版」と略記する。

2）特に聖杯伝説という観点から楽劇とその出典の分析を行った以下の拙論も参照されたい。なお、論述の都合上、本稿と多少説明が重なるところがある。

「楽劇『パルジファル』と聖杯」、『人文学論叢』第16号、愛媛大学人文学会、2014年12月。

ロッパ各地に流布したアーサー（Arthur）[3] 王伝説の一部をなしている。そのアーサー王伝説群の源泉となったのが、ジェフリー・オヴ・モンマス（Geoffrey of Monmouth）が中世ラテン語で著した『ブリタニア列王史（Historia Regum Britanniae)』（1138頃）[4] である。古代トロイアのアエネーアース（アイネイアース）の曾孫ブルートゥスが築いたブリタニア王国の諸王の事績を綴ったこの著作は、史書風の装いを採ってはいるが、史実との対応は極めて乏しい。その中で重要な位置を占めるアーサー王の物語も、ジェフリーが、先行する文書などを参考にして、ケルト民族の間で伝承されてきた伝説を、想像力を大いに羽ばたかせて集成したものであると考えられる。その後、ワース（Wace）は、アングロ＝ノルマン語によって記した『ブリュ物語（Roman de Brut)』（1154頃）で、『ブリタニア列王史』を下敷きにしながら、席次の序列をなくした「円卓」、そしてその円卓に集う騎士団という物語装置を着想する。

12世紀後半、フランスのクレチアンによって生み出されたのが聖杯探求の物語であり、その後、多くの中世詩人によって書き継がれ、アーサー王伝説群の中心的な物語の一つとなった。なお、現代ドイツ語での名称、“der Gral” または “der Heilige Gral” は、「聖杯」と訳されるのが一般的であるが、その形象は一義的ではなく、「杯」であるとは限らない。しかし、本稿では通例に従って、「聖杯」という名称を使用する[5]。

3）時代や言語によって表記が異なる。ラテン語ではArturus、英語ではArthur、フランス語ではArthur（アルテュール）、ドイツ語ではArtus（アルトゥス）などと表記される。ヴォルフラムの場合は、「アルトゥース（Artûs)」となる。

4）ジェフリー・オヴ・モンマス『ブリタニア列王史』瀬谷幸男訳、南雲堂フェニックス、2007年。

5）聖杯伝説に関する包括的な研究書として、以下のようなものがある。

マルコム・ゴドウィン『聖杯伝説』平野加代子・和田敦子訳、原書房、2010年。以下「ゴドウィン」と略記する。

Volker Mertens: Der Gral. Mythos und Literatur. Stuttgart: Philipp Reclam jun. 2003. 以下「Mertens」と略記する。

2．クレチアン・ド・トロワの叙事詩

⑴ 『ペルスヴァル』の成立

アーサー王物語の系譜において極めて重要な位置を占めるのが、クレチアン・ド・トロワ（Chrétien de Troyes）[6] である。古フランス語の韻文で著された一群の優れた騎士道物語は、その後の文学潮流に多大な影響を与えることになる。クレチアンには、アーサー王伝説に基づく騎士物語が五作残されている。妻への愛に溺れた騎士が冒険によって名誉を回復する『エレックとエニード』、トリスタン伝説を下敷きにした『クリジェス』、遍歴の約束の期限を守らなかった騎士が妻の赦しを得る過程を描いた『イヴァンまたは獅子を連れた騎士』には、それぞれにケルト伝説のモティーフがちりばめられている。『ランスロまたは荷車の騎士』では、アーサー王の妃グニエーヴル（グウィネヴィア）と騎士ランスロ（ランスロット）の愛という主題を初めて取り入れているが、作者のキリスト教的な道徳観と相容れなかったためか、結末部分をゴドフロワ・ド・ラニィに任せている。クレチアンは、『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』で、「聖杯」という主題を初めてアーサー王伝説に組み込み、キリスト教信仰の問題を秘教的な物語空間の中で展開する。

北フランスで活動したと推定されるこの詩人の実像については、資料が少なく、詳細は明らかにはされていない。『ランスロまたは荷車の騎士』（1180頃）の冒頭では、「シャンパーニュ伯家の奥方の御意向」（クレチアン、９）でフランス語の物語を語ると述べられている。この「奥方」とは、フランス王ルイ７世とアリエノール・ダキテーヌの長女マリーであり、両親の離婚後、父に引き取られたマリーは、1164年シャンパーニュ伯アンリ１世と結婚した。母親のアリエノールは、アキテーヌ公ギヨーム10世の娘として、アキテーヌに形成され

6）クレチアン・ド・トロワ『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』天沢退二郎訳、『フランス中世文学集２』、白水社、1991年。なお、同書に、クレチアンの『ランスロまたは荷車の騎士』神沢栄三訳も収録されている。以下「クレチアン」と略記する。
古フランス語とドイツ語の『ペルスヴァル』対訳注解書として、下記を参照した。
Chrétian de Troyes: Perceval. Stuttgart: Philipp Reclam jun. 1991. 以下「CP」と略記する。

た、宮廷の愛と騎士道を歌う「トゥルバトゥール」文化を身に付け、フランス王ルイ７世との最初の結婚、イングランド王ヘンリー２世との再婚によって、北フランスやイングランドに洗練された宮廷文化を広めたことで知られる。娘のマリーもアリエノールと同様に、宮廷文学の熱心な庇護者となった。クレチアンはこの時期、このマリー・ド・シャンパーニュの宮廷に滞在していたことになる。

『ペルスヴァルまたは聖杯の物語（Perceval ou le Conte du Graal)』（1180以降）は、完成している部分だけでも、韻文で9234行に及んでいる。冒頭に置かれた献辞では、フランドル伯フィリップが、アレクサンドロス大王に優る君主と賛美される。なお、伯の「父ティエリ・ダルザスは1146年に聖地から《聖血》を持ち帰ってセンセーションをまき起こしており、聖杯伝説に縁がある」（クレチアン、213）ことが、この物語が着想された理由の一つであろうと考えられる。フィリップ自身も1177年に聖地巡礼を行い、また1191年の第３回十字軍に加わっている（CP, 525)。

『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』は、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハを経て、ヴァーグナーに至る聖杯物語の原点となった作品である。その題材については、「原本を伯がクレチアンに下された」（クレチアン、144）と冒頭に述べられているものの、実際に該当する書籍は確認されておらず、物語の信憑性を高める手法である可能性が高い（CP, 527)。クレチアンは、様々な伝承を参考にしながら、独自の構想に従って、この物語を組み立てようとしたが、その死によって、作品は未完のままに終わらざるを得なかったものと推定される。

⑵ 『ペルスヴァル』の構成

原文には章（巻）区分はないが、天沢退二郎訳に従った章立てに基づいて、その構成を見ておこう。原詩の行数を丸かっこ内で、構成上の特徴を［　］で示す。

プロローグ（１－68）

フランドル伯フィリップへの献辞。与えられた本により、聖杯の物語を記す。

第１章：若き野蛮人（69－630）

ウェールズの若者ペルスヴァルは、目にした騎士に憧れて、母から心得を聞き、旅立つ［母の教えA］。

第２章：テントの乙女（631－833）

母の教えを十分に理解せず、出会った乙女に無理矢理に接吻し［母の教えB］、その恋人に復讐の誓いをされてしまう。

第３章：アーサー王廷の最初の訪問（834－1304）

アーサー王に敵対する真紅の騎士を倒し、その甲冑を奪う。奪われた王の黄金の杯を取り戻す［第１の訪問］。

第４章：ゴルヌマン・ド・ゴルオー（1305－1698）

海辺の城に住む騎士ゴルヌマンに馬、盾、槍、剣の使い方を学ぶ。敵に慈悲心をもち、婦人へ奉仕し、むやみに質問してはならないことを教わる［騎士の教えA］。母の元へ戻ろうと出発する。

第５章：ブランシュフルール（1699－2973）

敵に包囲されている乙女ブランシュフルールに救援を依頼される。騎士アンギジュロンとその主君クラマドゥーを倒して、アーサー王のもとに送る。恋人となったブランシュフルールを残して母の元へ急ぐ。

第６章：グラアルの城（2976－3421）

釣り人（漁夫王）の助言で聖杯城へ入り、一振りの剣を与えられる。先端から血の滴る槍、グラアル（聖杯）、銀の肉切台を見て、不思議に思う。ゴルヌマンの教えに従い、その場では質問せず、翌朝小姓に尋ねようと考える［騎士の教えB］。翌朝には城は空になっており、城外に出ると、跳ね橋が上がり、城へは戻れなくなる。

第７章：ペルスヴァルの従姉妹（3422－3690）

恋人の死を嘆く乙女に出逢い、漁夫王の傷について教えられる。漁夫王に

対して、槍やグラアルについて質問しなかったことを非難される。名を問われて、知らなかった自分の名前がペルスヴァルであると自ら「見抜く」。乙女が従姉妹であり、ペルスヴァルの母が死んだことを知る。

第８章：オルゲイユー・ド・ラ・ランド（3691－4143）

かつて接吻した乙女が惨めな姿をして馬に乗っているのに出会う。その恋人オルゲイユーに勝利し、その邪推を解く。乙女を着飾らせ、二人をアーサー王のもとに送る。

第９章：雪の上の血（4144－4602）

隼に襲われた雁の流した三滴の血でブランシュフルールの顔を思い出す。アーサー王の野営地から出陣したセグルモールとクーを倒す。ゴーヴァンによってアーサー王の元へ導かれる［第２の訪問］。

第10章：醜い乙女（4603－4815）

醜い乙女に聖杯城での失態をなじられ、聖杯城への再訪を決意する。ゴーヴァンは、主君の仇を討とうとするギガンブレジルと40日後に決闘することになる。

第11章：ゴーヴァンと小袖姫（4816－5652）

ゴーヴァンはチボーとその養い子のメリアン・ド・リスの槍試合に行き会う。チボーの妹娘である小袖姫の頼みでメリアンを倒す［ゴーヴァンの第１の冒険］。

第12章：エスカヴァロンの乙女（5656－6216）

ゴーヴァンは城の前で出会った騎士の招待を受け、その妹に歓待される。ゴーヴァンが兄妹の父の仇であることが判明し、攻撃を受ける。ゴーヴァンが穂先から血の出る槍を１年の間に持参する約束で休戦する［第２の冒険］。

第13章：ペルスヴァルと隠者（6217－6518）

ペルスヴァルは５年間神と縁のない戦いの日々を送る。聖金曜日に人に勧められて尋ねた隠者から、隠者、漁夫王の父が兄弟で、自分の母がその妹であることを知る。隠者から信仰の重要性を学ぶ［隠者の教えA］。

第14章：悪しき乙女（6519－7370）

ゴーヴァンは、楡の木の下にいる乙女の頼みで庭から馬を引いてくるが、礼儀を知らない乙女に罵倒される。ゴーヴァンが道で見かけて、その傷を治した騎士は実はグレオレアスという敵であり、馬を奪われる。ゴーヴァンはグレオレアスの甥を倒して馬を取り戻す［第３の冒険］。

第15章：不可思議の城（7371－8371）

ゴーヴァンは、渡し守から話を聞いて不可思議の城に乗り込む。窓から射られる矢を防ぎ、獅子を倒して、魔法を解く。女王、その娘である女王、孫の姫に歓待される。ゴーヴァンは、７日間は名前を伏せておく。

第16章：ギロムラン（8372－9234）

ゴーヴァンは悪しき乙女の連れの騎士を倒す。乙女の挑発に乗って、危険な瀬を騎馬で跳び、対岸の断崖に渡る。出会ったギロムランに城の女性達の正体を聞く。アーサー王の母、その娘でロット王の奥方（ゴーヴァンの母・アーサー王の妹）、その娘（ゴーヴァンの妹）である[7)]。ゴーヴァンは、父の代の仇であるギロムランとアーサー王の宮廷で７日後の決闘を約す。悪しき乙女の名はオルゲイユーズ・ド・ノグルであり、ギロムランに恋人を殺されてから、悪口を吐く様になったことが分かる。ゴーヴァンはアーサー王の元へ連絡のため小姓を派遣する。

物語はここで終わっている。それまでの作品が6000行規模であるのに対して、『ペルスヴァル』は、完成部分だけで9234行であり、その規模からしても雄大な構想への作者の並々ならぬ意欲が窺える[8)]。なお、その後数名の詩人が補作を試みている。

⑶ 『ペルスヴァル』の特徴

クレチアンは、ヴォルフラムを通して、ヴァーグナーに間接的に影響を与え

7）幼少時の別離の故に、ゴーヴァンは家族を認知することができなかったのである。
8）クレティアン・ド・トロワ『聖杯の物語、またはペルスヴァルの物語』佐佐木茂美訳注、大学書林、1983年、６－７頁を参照のこと。

ているので、簡単に、クレチアン版の特徴をまとめ、楽劇との関連性に触れておくことにする。

1）二重性

この作品には二人の主人公がいる。第１章から第10章までは紛れもなくペルスヴァル[9]が物語の中心にいる。ところがペルスヴァルが聖杯城での失敗を経験して、アーサー（アルテュール）王の宮廷に再度現れた時、筋は分岐し、もう一人の騎士が突然物語の前面に躍り出る。第11章から第16章まで、第13章「ペルスヴァルと隠者」を除いて、アーサー王の甥のゴーヴァン[10]の一連の冒険が綴られるのである。この奇妙な組み合わせについて、フラピエは、「ゴーヴァンの物語は、ペルスヴァルの物語と対位法をなすもの」[11]と解釈する。アーサー王の甥は、完成された騎士として、洗練された宮廷作法を一貫して示すが、あくまで世俗的な騎士道の枠に留まっている。それに対して、ペルスヴァルは、田舎育ちの若者として様々な経験を重ね、その中で犯した誤りを自覚して、贖罪しようとする。もしクレチアンが、この叙事詩を完成させることが出来たなら、物語の構成上、ペルスヴァルは漁夫王の城を再訪することは必然であろう[12]。

ヴァーグナー版では、凝縮性を求められる舞台芸術の条件に合わせて、こうした二重性は完全に放棄され、専らパルジファルの物語となる。ただし、「殿、

9）英語ではPercival、フランス語ではPerceval、ドイツ語ではParzivalなどと表記される。以下、クレチアンの場合は、「ペルスヴァル」と表記する。ヴォルフラムの場合は、「パルチヴァール（Parzivâl）」となる。

現代ドイツ語では「パルツィファル」というのが標準発音である。従って、ヴァーグナーの時代では「パルツィファル」と表記するのが妥当であるが、本稿は、ヴォルフラムとの関連を考慮し、中世文学に関わる部分では、ヴァーグナーに関連する箇所でも、「パルチヴァール」という表記を統一的に使用しておく。言うまでもなく、ヴァーグナーが最終的に楽劇の主人公名として採用するのは、「パルジファル（Parsifal）」という形である。

10）円卓の騎士の一人として名高いこの人物については、英語ではGawain、フランス語ではGauvain、ドイツ語ではGawanなどの表記がある。ヴォルフラムの場合は、「ガーヴァーン（Gâwân）」となる。

11）ジャン・フラピエ『聖杯の神話』天沢退二郎訳、筑摩書房、1990年、83頁。以下「フラピエ」と略記する。

12）ゴーヴァンは、第12章で、「穂先から常に血の出る槍を求める」（クレチアン、256）という誓約を立てるので、クレチアンが先を書き続けたとしたら、この騎士が聖杯に近づ

ガーヴァーンはおりません」（PA, 23）と騎士の一人が王に告げている様に、ガーヴァーンの存在そのものは背後に示されている。彼は、アンフォルタスのために労苦を重ねて薬草を採ってくるが、その効き目がないと知ると、再びよい薬草を探しに行っているのである。ここでは、ガーヴァーンも円卓を離れ、世俗的な騎士生活から聖杯城での奉仕へ身を移しているようである。

２）語り手による登場人物名の制御

登場人物の名前を語り手が直ぐに告げないという点も、大きな特徴である。アーサー王や騎士イヴォネなどは、最初から語り手がその名を挙げるものの、多くの場合は、登場人物が自ら名乗ったり、あるいは既出の人物を紹介する形で、その名前を読者が知ることになる。特に奇妙で印象的なのは、主人公の名前（Perchevax li Galois）がようやく第７章になって、漁夫王の城の訪問後に明らかになる箇所である（CP, 200）。

> さて、若者は自分の名を知らなかったが、それをこのとき見抜いて、自分の名はペルスヴァル・ル・ガロワであるとこう言った。自分の言っていることが本当かどうかわからない。けれど彼の言うことは本当で、しかも自分でそれがわからない。（クレチアン、207）

それまでは「若者」として語られていた人物に、こうして名前が与えられ、「クレチアンの聴衆と主人公自身とは、まったく同時にペルスヴァルという名を知る」（フラピエ、76）ことになる。まことに不思議な設定である。会話の

く場面も描かれたかもしれない。13世紀の前半、ドイツのハリンリヒ・フォン・デム・テュルリン（Heinrich von dem Türlin）は、ヴォルフラムの影響を受けつつ、『王冠（Diu Crône）』で、ゴーヴァンが聖杯城に到達し、質問をするという物語を残している（ゴドウィン、106－108；Mertens, 123－133）。

なお、ポフィレは、ブルターニュの「海に沈んだイスの町」伝説との関連から、ペルスヴァルがグラアルの城を訪れる可能性に否定的な立場を取る。

アルベール・ポフィレ『中世の遺贈　フランス中世文学への招待』新倉俊一訳、筑摩書房、1994年、212－218頁。

相手は従姉妹で、息子が去った悲しみのためペルスヴァルの母親が死んだことを教えてくれる。

楽劇『パルジファル』には、これに呼応する様な場面がある。第１幕でグルネマンツに名を問われて、「私には名前がたくさんあったが、もうどれも覚えていない」（PA, 43）としか答えられなかった「愚か者」は、第２幕で名前がようやく判明する。ただし、ヴァーグナーではクンドリーによって告げられるのである。第２幕で花の乙女達の合唱に割って入る「パルジファル、その場に留まりなさい」というクンドリーの呼びかけを聞いて、「そんな名前で昔母が夢見る様に私の名前を呼んだことがあった」（PA, 101）とパルジファルが反応する場面は、動から静への、息を呑むような極めて印象的な転換をなしているが、突然自分の名前を悟るという設定は、クレチアンとも相通じるところがある。ただし、第１幕の段階でも、自分の名前は覚えていなくても、母の名前がヘルツェライデであるとは知っている。母の死を告げるのは、同様にクンドリーの役割（第１幕）である。

３）事象の前後照応と反復

母、騎士、隠者による教育（A）とその成果（B）という様な事象の反復と連鎖が特徴的である。少年は誰かに教えを受けるが、その教えを形式的にしか理解していないために、様々な錯誤が生じる。そのために、次の教えが必要となる。これがペルスヴァルの成長を導くのである。また、この騎士は、打ち負かした相手を次々とアーサー王の元へ送っており、これによって、出来事の反復という物語のリズムが形成されている。ゴーヴァンが絶えず新しい人物に会って、冒険を繰り返すという連鎖構造も、同じ意味をもつ。

ヴァーグナーの楽劇は、これに対して、大まかに言えば、聖杯に深く関わる荘厳な雰囲気の第１幕と第３幕が、花の乙女達の合唱に彩られた第２幕を挟んでシンメトリーをなしている。叙事文学を劇文学に変換するために案出された方策である。魔法の園で待ち受けるクリングゾルは、中間の幕にしか登場しないが、アンフォルタスやグルネマンツは、両端の幕の中核的人物となる。パル

ジファルとクンドリーのみが３つの幕を通して登場する設定になっている。

３．ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの叙事詩

⑴ 『パルチヴァール』の成立

クレチアンの叙事詩をもとに中高ドイツ語で書かれたのがヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ（Wolfram von Eschenbach）の『パルチヴァール（Parzival）』[13] であり、これが楽劇構想の直接的な基礎となっている。1200年頃に着手され、1210年頃完成したと推定される。成立の事情の詳細は不明である。

『パルチヴァール』の写本は、17の完本の他に、67の断片が残されており、今日では、カール・ラッハマンの校訂に基づいて16の巻（章）に分けるのが一般的である[14]。14巻以降は、クレチアンでは未完成部分である[15]。また、父親ガハムレトの冒険が第１巻と第２巻で前史として描かれており、ヴォルフラムは、物語を完結させただけではなく、時間軸を遡って拡張させているのである。

13）Wolfram von Eschenbach: Parzival. 2 Bde. Nach der Ausgabe Karl Lachmanns. Revidiert und kommentiert von Eberhard Nellmann. Übertragen von Dieter Kühn. Bibliothek des Mittelalters. Band 8/1, 8/2. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1994.

以後「WP」と略記する。引用の数字は詩節を示す。また、第２巻の巻末の注解からの引用は、「S」を記して、頁を示す。本文からの引用は拙訳による。詩行に対応した改行は行わない。

解釈に関しては、下記の文献も参照した。

Wolfram von Eschenbach: Parzival. 2 Bände. Mittelhochdeutscher Text nach Karl Lachmann. Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Spiewok. Stuttgart: Philipp Reclam jun. 2010. 以下「Reclam版」と略記し、巻と頁を示す。

Wolfram von Eschenbach: Parzival. In Prosa übertragen von Wilhelm Stapel. München: Albert Langen/Georg Müller 1973.

14）ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ『パルチヴァール』加倉井・伊東・馬場・小栗訳、郁文堂、1974年、445頁。以下「ヴォルフラム」と略記する。なお、本稿では、ヴォルフラムの叙事詩の登場人物や地名は、原則として、郁文堂版の翻訳に従う。

15）ヴォルフラムは、クレチアンの模倣者達がフランスで著した続編については全く知らずに、独自の発想で、聖杯物語を完成させたと考えられている（WP, S. 420）。

⑵ 『パルチヴァール』の構成

さて、24810行に及ぶ長大な叙事詩『パルチヴァール』の巻の構成を概観しておこう。巻のタイトルは、郁文堂版の『パルチヴァール』を使用する。またクレチアンで概ね対応する章をタイトル後の［　］に記入しておく。また、構成上の特徴を［　］で示す。

第１巻：ガハムレトとベラカーネ

アンショウヴェ（アンジュー）王の次男ガハムレトは、東方世界を訪れ、黒人の女王ベラカーネの窮地を救い、女王を妻とし、王国を手に入れるが、冒険を求めて旅立ち、ベラカーネは白と黒のまだらの肌の息子フェイレフィースを生む。

第２巻：ガハムレトとヘルツェロイデ

スペインを経て、ヴァーレイス（ウェールズ）[16] に来たガハムレトは、槍試合で勝利したため、裁定に従って、その地の女王ヘルツェロイデと第二の結婚をする。ガハムレトは戦いで命を落とし、ヘルツェロイデには、息子パルチヴァールが残される。

第３巻：パルチヴァールの少年時代［第１～４章］

息子が騎士として死ぬことを恐れたヘルツェロイデは、森で世俗を離れた生活を送る。ある日騎士に出会ったパルチヴァールは、その生活に憧れ、母から教えを受けて［母の教えA］、アルトゥースの元へ出発する。途中でエシューテ夫人に接吻して指環を奪ったため［母の教えB］、夫のオリルス公に追われる。行き会った従姉妹のジグーネから、自分の名前と身分を知る。ナンテス（ナント）のアルトゥース王の宮廷で［第１の訪問］、「赤い騎士」イーテルを殺して、その甲冑を奪う。老騎士グルネマンツのもとで、むやみ

16）ヴァーレイス（Wâleis）については、郁文堂版（ヴォルフラム、33）とReclam版（Bd.1, 107）では、ヴァロワ（Valois）と解釈しているが、Deutscher Klassiker版（WP, 60）では、ウェールズ（Wales）と現代語訳している。原典（クレチアン、154；CP, 37）を考えあわせて、ウェールズとするのが妥当であろう。

に質問をしては行けないと教えを受ける［騎士の教えA］。

第４巻：パルチヴァールとコンドヴィーラームールス［第５章］

パルチヴァールは、クラーミデー王に包囲されている女王コンドヴィーラームールスを救い、クラーミデー王とその宮内卿キングルーンをアルトゥース王の元へ送る。妻となったコンドヴィーラムールスを残して、母を訪ねようと出発する。

第５巻：パルチヴァールの最初の聖杯城訪問［第６～８章］

立派な服を着た漁師（アンフォルタス）に教えられて、聖杯城に入る［第１の聖杯城訪問］。その穂先から血の滴る槍や聖杯を中心に行われる儀式、苦しむアンフォルタスや一同の悲痛な嘆きに接して不思議に思い、更に剣を贈られるが、先の騎士の教えに従って質問しない［騎士の教えB］。翌朝には城内は空になっていたため、パルチヴァールは城を出る。再会したジグーネに、聖杯城で質問をしなければならなかったことを咎められる。エシューテ夫人と夫オリルスに会って、オリルスを倒し、夫婦を和解させ、アーサー王の元へ送る。

第６巻：アルトゥースの宮廷におけるパルチヴァール［第９～10章］

パルチヴァールは、鷹に襲われた鵞鳥の流した三滴の血でコンドヴィーラームールスの顔を思い出し、放心状態になる。アルトゥース王の宮廷から出陣したゼグラモルスとケイエを倒した後、ガーヴァーンによってアルトゥース王の元へ導かれる［第２の訪問］。そこに現れた聖杯城の使者である醜い女クンドリーエにアンフォルタスに質問しなかったことを非難されたパルチヴァールは、聖杯城への再訪を決意する。また、クンドリーエは、魔法の城に捕らえられている王妃達の救出を一同に依頼する［魔法の城A］。ガーヴァーンは、兄キングリジーンの敵討ち（実は誤解）を果たそうとするキングリムルゼルと40日後に決闘することになる。

第７巻：ガーヴァーンとオビロート［第11章］

ガーヴァーンは、決闘の地へ赴く途中、メルヤンツ王に包囲されている城で、オビロートという少女へのミンネ奉仕のため王を倒し、王と少女の姉の

オービエを結婚させる［ガーヴァーンの第１の冒険］。

第８巻：ガーヴァーンとアンチコニーエ［第12章］

決闘の地の王フェルグラハト（キングリジーンの息子）の妹アンチコニーエと親しくなったガーヴァーンは、主君の仇として攻撃を受ける。キングリムルゼルは、誓約のため戦いを中止させる。王は、ガーヴァーンに聖杯を探させることにする。ガーヴァーンは、キングリムルゼルと一年後に決闘することになる［第２の冒険］。

第９巻：パルチヴァールとトレフリツェント［第13章］

パルチヴァールは聖杯城探索の途上、再びジグーネに会う。クンドリーエの跡を追う試みは失敗し、隠者トレフリツェントを尋ねる。隠者から聖杯の由来、聖杯守護の家系について聞く。アンフォルタス、トレフリツェント、レパンセ・デ・ショイエ、ジョイジーアーネ（ジグーネの母）、ヘルツェロイデは兄弟姉妹である。隠者から、イテール殺害が親族殺しになること、息子が手元を去った悲しみで母が死んだこと、アンフォルタス王へ問いを発しなかったことで、大きな罪を負っていることを教えられる［隠者の教えA］。

第10巻：ガーヴァーンとオルゲルーゼ［第14章］

キングリジーン殺害の嫌疑が晴れたガーヴァーンは、聖杯の探索を続ける。出会った美しいオルゲルーゼにミンネ奉仕をするため、無礼な態度を取る彼女に同行する［ミンネ奉仕A］。傷ついた騎士ウリーアンスに手当をしてやったのに自分の馬を奪われてしまうが、その後その馬を別の騎士リショイスから取り戻す。オルゲルーゼは舟に乗って去る［第３の冒険］。

第11巻：魔法の城のガーヴァーン［第15章］

渡し守から、四人の女王と400人の婦人が捕らえられた魔法の城シャステル・マルヴェイレの話を聞いて、ガーヴァーンは城に乗り込む［魔法の城B］。床を動き回る不思議なベッドに飛び乗り、周囲の壁から受ける投石や石弓の攻撃を防ぎ、最後にライオンとの戦いに勝利したガーヴァーンは、傷ついた体を、クンドリーエから薬を学んだ老女王アルニーヴェ（アルトゥースの母でガーヴァーンの祖母）に癒やしてもらう。

第12巻：ガーヴァーンとグラモフランツ［第16章］

その城にはガーヴァーンの母ザンギーヴェ、妹のクンドリーエー[17]とイトニエーもいる。城の望楼にある不思議な柱に写ったオルゲルーゼの姿を見て、ガーヴァーンは城を出て、彼女の望みに従って、グラモフランツ王の守る葉冠を手に入れる。グラモフランツは、自分の父の仇をその相手の息子であるガーヴァーンで討とうと、決闘を申し込む。オルゲルーゼは、亡き夫の復讐のために、グラモフランツを倒してくれる騎士を探していたという事情を打ち明け、ガーヴァーンのミンネを受け入れる［ミンネ奉仕B］。

第13巻：アルトゥースとガーヴァーン［第16章］

ガーヴァーンは小姓をアルトゥース王の元へ送り、一同は決闘に立ち会うために出立する。ガーヴァーンは、魔法の城の由来と城主クリンショルについて知る。アルトゥースは、ガーヴァーンとの再会を喜び、グラモフランツを呼び寄せるため、使者を送る。戦いに備えて遠乗りに出たガーヴァーンは騎士（パルチヴァール）と出会う。

第14巻：パルチヴァールとガーヴァーン

一騎打ちをしていたガーヴァーンを小姓が見て名を呼ぶと、パルチヴァールも相手が誰だか気づき、戦いをやめる[18]。パルチヴァールはアルトゥース王の宮廷に迎えられる［第３の訪問］。パルチヴァールは、ガーヴァーンに替わって、グラモフランツと立ち会い、相手を倒す。アルトゥース王は、好意を寄せ合っているグラモフランツとイトニエーを娶せ、グラモフランツとオルゲルーゼを和解させて、ガーヴァーンとの決闘を止めさせることに成功する。パルチヴァールは妻のことを思い出して一人陣営を去る。

第15巻：パルチヴァールとフェイレフィース

パルチヴァールは、森の中である騎士と一騎打ちを始めるが、剣が折れて、相手が休戦を申し出る。その異教徒の騎士は、異母兄のフェイレフィー

17）このクンドリーエー（Cundrîê）は、聖杯城の使者クンドリーエ（Cundrîe）とは別人である。

18）当然ながら、甲冑を身に付けている相手の顔を認識することはできない。

スであることが分かり、アルトゥース王のもとで祝宴が開かれる。聖杯城の使者クンドリーエが現れ、パルチヴァールが聖杯王に選ばれたことを告げる。パルチヴァールは兄とともに城へ向かう。

第16巻：聖杯王パルチヴァール

クンドリーエの案内で二人は聖杯城に入る［第２の聖杯城訪問］。パルチヴァールがアンフォルタス王に問いかけることによって、王の傷は癒え、パルチヴァールが新しい王となる［隠者の教えB］。コンドヴィーラームールスは二人の息子とともに駆けつける。フェイレフィースは、洗礼を受けてキリスト教徒となり、アンフォルタスの妹レパンセ・デ・ショイエと結婚、インドに帰って、その息子ヨーハンがキリスト教を広める。パルチヴァールの長男ロヘラングリーンは聖杯守護にあたり、次男のカルデイスは世俗の王となる。ロヘラングリーンは、白鳥の騎士として、ブラバントに赴いたことがある。

ヴァーグナーは、1840年代においては、周知の如く、第16巻に登場する息子のローエングリーンを中心に歌劇を書くことになるのである。

⑶ 『パルチヴァール』の特徴

ヴォルフラムとクレチアンの差異を中心に『パルチヴァール』の特徴を見ておこう。ヴァーグナーとの関連については、後に述べることにする。

１）「原典」と語り手

ヴォルラムは、構成の対応関係で確認出来る様に、紛れもなく、クレチアンから多くを受け継いでいる。しかし、『パルチヴァール』の巻末部分では、語り手は、この物語がキオート（Kyôt）なる人物の書物に基づいていると主張している。

> トロイスのクリスチァーン（クレチアン・ド・トロワ）師がこの物語を正しく伝えていないのであれば、キオートが怒るのも当然である。キオート

が真実の話を伝えているのだ。プロヴェンツ（プロヴァンス）の人は、アンフォルタスが失った聖杯を、定められた如くにヘルツェロイデの息子が得た次第を最後には語ってくれている。プロヴェンツからドイツの私たちの元へ、真実の話とその結末がもたらされたのだ。私、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハは、師がそこで語った以上のことは口にするのはやめよう。（WP, 827）

クレチアンの記述は誤っており、キオートが正しいというのであるが、前述した様に、そもそもクレチアンの叙事詩は物語が完結しないままに終わっている。更に、文学史家達の綿密な探索にもかかわらず、現在に至るまで、キオートに該当する人物は確定できていない。

また、当初はアラビア語からの翻訳である（WP, 416）とされているが、その少し後では、キオートは、ドーレト（トレド）でアラビア語の最初の版を発見し、解読を試みる一方で、アンショウヴェ（アンジュー）で手にしたラテン語の書物などからも多くを学んだ（WP, 453－455）という報告がなされており、明確な一貫性が認められない[19)]。対応する詩人が見つからず、またヴォルフラムの記述に多くの矛盾が含まれることから、「現在では大体文学上のフィクションと見て、キオート不在説が有力」（ヴォルフラム、461）となっている。従って、キオートに対する言及は、あくまで物語技法の一つと見なすべきであろう。

クレチアンが登場人物の名前をなかなか告げないのとは対照的に、ヴォルフラムでは、登場人物は、本人が名乗らなくても語り手が告げることが多い。ただし、読者（聞き手）に緊張感をもたせるために、直ちに新しい人物についてその名前などを紹介しない場合もあり、典型的な例は、第15巻でパルチヴァールと立ち会う「異教の騎士」登場の場面である。また地名も具体的に挙げられ

19）Eberhard Nellmannの注解は、ジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリタニア列王史』とワースの『ブリュ物語』が念頭におかれている可能性を指摘している（WP, S. 670）。当然、これらの書物には、まだ聖杯もパルチヴァールも登場しない。

ており、遠い異国（現在のイギリスやフランス、さらには東方諸国など）の話であるとは言え、物語の「現実性」を増強している。

クレチアンで特異な形で示された主人公の名前は、本人も母親から言われている「よい子、可愛い子、きれいな子（bon fîz, scher fîz, bêâ fîz）」（WP, 140）という愛称形（フランス語に基づく）しか知らなかったようであり、本名は、従姉妹のジグーネの口から告げられて、自らも知ることになる。ジグーネは「あなたはパルチヴァールと言う名前で、〈真ん中を貫いて〉という意味なのです（deiswâr du heizest Parzivâl. der nam ist rehte enmitten durch.）」（WP, 140）と述べ、読者（聴衆）にも若者の名前が判明する。本来、ケルト系の名前Peredurに起源があるようだが、クレチアンはPercevalと変え、ヴォルフラムはさらにParzivâlという形を選び[20]、民間語源的な解釈を一部用い、「真ん中を貫いて」としているが、全体として古フランス語では、「谷を貫け」（WP, S. 531）という意味になると考えられている。

原典をめぐる口上に見られる様に、ヴォルフラムの語り手は、個性的である。第６巻で、パルチヴァールに槍で突き落とされ、落馬したゼグラモルスについて、「彼自身、休む場所を見つけるために、起き上がらなければならなかった。皆様もご存じの如く、普通は休むために横になるものなのだが」（WP, 289）と説明が加えられる。こうした諧謔的表現は至る所にある。

２）二重性と対称性

クレチアンを踏襲した跡は、パルチヴァールとガーヴァーンの二重の主人公設定に明確に認められる。パルチヴァールが主体となる巻は、第３～５巻、第９巻、第15～16巻であるのに対し、ガーヴァーンは、第７～８巻、第10～13巻で主役を務め、この両者が交錯するのが、第６巻と第14巻である。即ち、二人の主人公にほぼ等しい分量の記述が充てられているのが分かる。最初から完成した騎士としての姿を示すガーヴァーンに対して、他者から学び、失敗を糧と

20）写本によっては、z は c 、v は f で綴られている（WP, S. 531）。

して成長するパルチヴァールという対比関係は、クレチアンと同様であるが、物語の完結によって、「魔法にかけられた世界（聖杯城と魔法の城）の解放と囚われた人の救済」（ヴォルフラム、448）というテーマが明確化している。

アルトゥース物語のパターン、王の宮廷へ主人公が三度現れるという形式は、ここでも見られる。それに加えて、パルチヴァールが聖杯城での過ち（第５巻）を償おうと、再訪を目指し、巻末でクンドリーエに導かれて、聖杯城へ入る（第16巻）という、物語の前半と後半が照応する対照的構成は、物語の完結性を高めている。コンドヴィーラームールスとの別れ（第４巻）と再会（第16巻）が、時系列的にも聖杯城入城と隣接していることにも、物語作家の巧みな手腕が表れている。

３）交差する二つの家系

前史としてパルチヴァールの父親ガハムレトの冒険が加えられたことにも示される様に、クレチアンに比べると、『ペルスヴァル』が未完に終わったことを差し引いても、ヴォルフラムによって体系的に構築された物語世界には、遙かに緻密な設計がある。登場人物は182名に及ぶが、その中の113名が「マッツァダーン―アルトゥースの家系とティトゥレル―聖杯の家系に属する」（ヴォルフラム、450）のである。

アルトゥースの家系には妖精の血が流れており、先祖を遡れば、ガハムレトはその一族に含まれる（WP, 56）。ガハムレトのアラビアやエジプトまで足を伸ばす華やかな遍歴、そして、名誉とミンネを求める騎士ガーヴァーンの冒険もアルトゥース系の典型的な特徴を表している。

それに対して、「神に召されて、遣わされた天使に従う人々」（WP, 474）が、聖杯を守護する一族であり、聖杯城主は、ティトレルからその息子フリムテル、更にその息子アンフォルタスへと受け継がれている。アンフォルタスの妹であるヘルツェロイデの血を受け継ぐパルチヴァールは、聖杯守護の家系にも属する。世俗的な名誉を求める騎士生活と、神への奉仕を目指す宗教的な理念がこのパルチヴァールという人物で融合するのである。

4．ヴァーグナーの楽劇『パルジファル』

(1)『パルジファル』の成立

歌劇『タンホイザー』を完成したヴァーグナーは、1845年保養先のマリーエンバートで、ヴォルフラムの現代語訳された『パルチヴァール』を読む。しかし、パルチヴァールの息子ロヘラングリーンを主人公にした歌劇『ローエングリーン』（総譜完成1848、初演1850）がまず先に書かれることになる。ヴァーグナーは、チューリヒ滞在中の1857年頃から『パルチヴァール』に取り組み始める。1865年に、散文による第１草稿が書かれるが、『トリスタンとイゾルデ』（初演1865）、『ニュルンベルクのマイスタージンガー』（初演1868）、『ニーベルングの指環』四部作（全曲上演1876）が優先された結果、台本は1877年、総譜は1879年から1882年にかけての完成にずれ込んで、結果的に『パルジファル』はヴァーグナー最後の舞台作品となった[21)]。

表題（同時に主人公の名前でもある）は、ヴォルフラムではParzivâl（パルチヴァール）であり、現代語表記ではParzival（パルツィファル）である。ヴァーグナーは、1877年の散文による第２草稿までは、Parzivalの表記を用いているが、その後、この名前がアラビア語に由来するというゲレスの説に従って、Parsifal（パルジファル）と改め（協会版、67）、これが最終形となった。

21）ボルヒマイアーなどが指摘する様に、ヴァーグナーには、インドを舞台にした、仏教的な主題を扱う『勝利者達（Die Sieger)』（1856）の構想があった。本稿では詳述しないが、テーマ設定や登場人物の人間関係のある部分は、放棄されたこの構想を転用する形で、『パルジファル』に受け継がれている。

Richard Wagner: Die Sieger. In: Richard Wagner: Sämtliche Schriften und Dichtungen. Volksausgabe. 11. Band. Leipzig: Breitkopf & Härtel o. J., S. 325.　以下「SSD 11」と略記する。

Dieter Borchmeyer: Richard Wagner. Frankfurt am Main: Insel 2002, S. 318ff.

三光長治・高辻知義・三宅幸夫監修『ワーグナー事典』、東京書籍、2002年、580－581頁。以下「事典」と略記する。

カール・スネソン『ヴァーグナーとインド精神』吉永千鶴子訳、法政大学出版局、2001年。

⑵ 『パルジファル』の構成

ヴォルフラムの長大な叙事詩を劇化するのに際して、ヴァーグナーは当然ながら、大幅な登場人物と出来事の刈り込みを行っている。全体は３幕で構成される。

劇には前史がある。ティトゥレルのもとに、天使が訪れて、最後の晩餐に用いられ、その後十字架上のキリストの血を受けた杯と、キリストを刺した槍の二つを託す。ティトゥレル王は、純潔な者を集め、城を築いて、それを守護する。騎士団への参加を拒まれたクリングゾルは、魔法の庭園に美女を集めて、騎士達を誘惑しようとする。ティトゥレルの王位を継いだ息子のアンフォルタスは、ある美女（クンドリー）に惑わされ、聖なる槍を奪われて、その槍で脇腹に傷を負う。癒えぬ傷に苦しめられるアンフォルタスは、聖杯による神託で示された、「純粋なる愚か者」が自分を救ってくれるのを待ち続けている。

第１幕

前半の舞台は聖杯城の近くの森。湖で、脇傷の痛みを和らげようとアンフォルタス王が水浴をしようとしている。馬に乗った荒々しい女クンドリーがアラビアのバルサムを王のために持参する。騎士グルネマンツは、小姓達に、聖杯城の由来や、アンフォルタスの傷のことを語って聞かせる。そこに、白鳥を弓で射殺した少年が連れてこられ、聖域での殺生を咎められる。少年は、自分の名前も知らず、母の名前がヘルツェライデであること位しか覚えていない。クンドリーは、少年の母が死んだことを告げる。グルネマンツは、この少年が「純粋なる愚か者（der reine Tor）」（PA, 37）であるかもしれないと考えて、聖杯城へ連れてゆくことにする。

後半は、聖杯城の内部。苦しむアンフォルタスは、ティトレルに促されて、厨子から聖杯を出させると、上方から光が注がれる。騎士一同は、聖杯によって聖別されたパンとぶどう酒を取る。パルジファルは儀式を見るだけで、一同が去った後に、グルネマンツに問われても一言も答えない。

第２幕

クリングゾルの魔法の城。クリングゾルは、クンドリーにパルジファルの誘惑を命じる。パルジファルはクリングゾルの手下の騎士達を倒して、城に近づく。

魔法の園に舞台が変わる。花の乙女達が、パルジファルを誘惑しようとするので、若者は戸惑う。そこにクンドリーが「パルジファル」と名を呼び、乙女達を去らせる。クンドリーは、彼の母の死の様子を語り、接吻をする。すると、パルジファルは、アンフォルタスの苦しみの原因を悟る。誘惑に失敗したクンドリーに呼ばれて現れたクリングゾルは聖槍を投げるが、その槍は空中に停止し、それをパルジファルが掴んで、十字を切ると、城と魔法の園は崩れ落ちる。

第３幕

聖杯城の近くの野原。隠者となったグルネマンツが、呻き声を上げるクンドリーを見つけ、眠りから目覚めさせる。黒い甲冑に身を包んで現れた騎士に、グルネマンツは、聖金曜日であることを教え、騎士の武装を解かせる。それは聖なる槍をアンフォルタスの元へ届けようと、遍歴を重ねてきたパルジファルであった。クンドリーに両足を洗ってもらったパルジファルは、自分の「最初の役目」として彼女に洗礼を施す。自然は、聖金曜日の陽光のもとに春の輝きを示す（聖金曜日の音楽）。

聖杯城の内部。ティトゥレルは、自分の死を望むアンフォルタスが長らく聖杯の儀式を執り行わなかったため、ついに亡くなり、騎士一同は嘆き悲しんでいる。その責任を感じつつも、聖杯の開帳を拒むアンフォルタスの前に現れたパルジファルが、聖槍を傷口に触れると王は癒える。聖杯城の新しい王となったパルジファルが、聖杯を開帳させると、白い鳩が舞い降りて、彼の頭上に留まる。クンドリーは息絶える。一同が聖杯の祝福を受けるうちに幕となる。

以上は、台本による作品の概要である。実際の舞台では、劇場の機能によっ

ての制約もあり、また、演出家による解釈で、大小様々な改変が施されることになる。

⑶ 『パルジファル』の特徴

ヴォルフラムの登場人物は182名に及ぶが、『パルジファル』の役名が与えられた登場人物は、アンフォルタス、ティトゥレル、グルネマンツ、クリングゾル、クンドリー、パルジファルの６名のみであり、他に役名のない２名の騎士と４名の小姓がいる程度である[22)]。ヴァーグナーは、この様に、登場人物を絞り、また物語の構成を大きく変更した。

１）登場人物の整理と役割の再編成

アルトゥス（アーサー、アルトゥース）と円卓の騎士達に関しては、ガーヴァーンの名前が台詞の中で挙げられる程度で、アルトゥス王はその影さえ消されている。『パルチヴァール』でのガーヴァーンの魔法の城での冒険は、パルジファルとクリングゾルの配下との戦いに置き換えられている。

ガハムレトとヘルツェロイデというパルチヴァールの親の世代は、語りの中で説明されるのみに留まっている。また、ヴォルフラムにおける「ティトゥレル、フリムテル、アンフォルタス」という聖杯王の系譜では、フリムテルの代が跳ばされた形に書き換えられている。パルジファルの母親とアンフォルタスとの血縁関係も示されていないし、パルジファルの妻コンドヴィーラームールスと二人の息子、異母兄フェイレフィースも登場しない。

ヴォルフラムと大きく異なるのは、特にアンフォルタスの扱い方である。叙事詩で二人の騎士の冒険が綴られるとしたら、楽劇では「純粋なる愚か者」と並んで、苦悩する聖杯王が焦点化されている。第１幕「いや、聖杯は覆ったままにしておけ」と第３幕「そうだ、何と辛いこの私」というかなり長い独唱部分が与えられていることからも、それは明らかである。ヴァーグナー自身も、

22）合唱の形で、聖杯城の騎士達、若者達と少年達（高みからの声）、花の乙女達（６名に独唱部分がある）が加わる。また、アルト独唱（高みからの声）による短い歌唱が第１幕の幕切れにある。

1859年の構想段階ですでに、「アンフォルタスが中央に位置しており、中心的な人物」[23] だと考えていた。聖杯を開帳せずに死を願うアンフォルタスは、この時期に総譜作成に取り組んでいた『トリスタンとイゾルデ』で、傷を覆う包帯を引き裂いて、死に憧れるトリスタンの分身なのである。

２）クンドリーの複合的性格構成

クンドリーの名前は、ヴォルフラムにおける聖杯城の使者、教養があり、薬の調合にも通じているものの、異様な容貌の魔女クンドリーエに基づく。この魔女は、彼女の弟とともに、インドの女王ゼクンディルレからアンフォルタスに送られた人物であり（WP, 519)、東洋（オリエント）との関連が随所に示されるクンドリーと確かに幾つかの共通点をもっている。

しかし楽劇のクンドリーには、叙事詩から他の人物の特性も取り入れられている。名前をパルチヴァールに教えてくれるのは、従姉妹のジグーネの役目である。叙事詩では、ジグーネとクンドリーエの二人とも、聖杯城で問いを発しなかったことを責めているし、第９巻冒頭で立ち去ったばかりのクンドリーエを追う様に、ジグーネがパルチヴァールに助言していることなどを考えると、この両者は重なり合う点がある。なお、母の死を教える役割は、叙事詩ではトレフリツェントに振られている。

第10巻以降、ガーヴァーンを魅惑し、翻弄するオルゲルーゼという女性がいる。ヴァプネフスキーは、クンドリーがこのオルゲルーゼの特徴を受け継いでいるという興味深い指摘を行っている[24]。アンフォルタスのミンネの対象であったこと、唯一パルチヴァールが彼女の魅力に抵抗できたこと、その力を恐れつつクリングゾルの魔法の領域に移り住んだことという三点である。

第１点に関しては、トレフリツェントの語りに従えば、アンフォルタスは聖杯を狙う異教徒の戦いで負傷したことになっているが（WP, 479)、オルゲルー

23）Richard Wagner an Mathilde Wesendonck. Tagebuchblätter und Briefe 1853-1871. Berlin: Alexander Duncker 1904［Nachdruck: Hamburg: tredition］, S. 205.
24）Peter Wapnewski: Der traurige Gott. München: Deutscher Taschenbuchverlag 1982, S. 236.

ゼはアンフォルタスからのミンネ奉仕の間の「災難」という形の説明のみにとどめている（WP, 616）。第２点についてであるが、オルゲルーゼの語るところによれば、グラモフランツ王を倒せる強い騎士と見込んでパルチヴァールに言い寄るものの、妻がいる上に、聖杯探索の最中でもあるという理由で、断られてしまう（WP, 619）。第２幕でのクンドリーの誘惑とパルジファルの覚醒の場面は、楽劇の最大の見せ場であるのに対し、叙事詩では、オルゲルーゼの執念を表す一挿話にしかすぎないが、ヴァーグナーの台本作成に影響を与えた可能性はある。

第３点のクリンショルとオルゲルーゼの関係についても、確かにある種の並行関係が認められる。クリンショルの魔法の城の望楼にある不思議な柱には、遠くの光景が映し出され、ガーヴァーンはそこにオルゲルーゼの姿を認めるが、これは第２幕冒頭でクリングゾルが「金属の鏡」（PA, 73）でパルジファルの動静を監視する場面に対応する。オルゲルーゼは、魔法で男女を自由に操ることができるクリンショルを恐れて、贈り物をして協定を結び（WP, 617）、その領内でグラモフランツへの復讐を企てている。魔法の城、報復、誘惑といった要素の組み合わせは、大きく変形されて、中世叙事詩から楽劇へと受け継がれている。

クンドリーは、ヴァーグナーにおいては、全ての幕に登場する（ただし第３幕では歌わない）重要人物に引き上げられているが、その際に新約聖書的な関連[25]が強く暗示される[26]。第２幕での「私はその子供が母の胸にすがるのを

25）ヴァーグナーは、ドレースデンで1848年に『ナザレのイエス（Jesus von Nazareth）』（SSD 11, 273－324）というイエスを主人公にした歴史劇の草案に取り組んだ。しかし、「『イエス』劇の構想は《ニーベルングの指環》執筆の準備」（事典、579）に留まり、それ以上進展することはなかった。

なお、バイロイト時代の1880年に『宗教と芸術（Religion und Kunst）』という論文を書いている。「宗教が人工的になった時代では、宗教の核心部分を救うのは芸術に任されていると言うことが出来るだろう」という冒頭の文は、『パルジファル』の理念の表現でもある。

Richard Wagner: Religion und Kunst. In: Richard Wagner: Dichtungen und Schriften. Jubiläumausgabe in 10 Bänden. Hrsg. Von Dieter Borchmeyer. Band 10. Frankfurt am Main: Insel 1983, S. 117-163.

見ました」（PA, 105）という語りは、直接的にはヘルツェライデと幼いパルジファルを表しているが、これは言うまでもなく聖母子像の再現であり、母の死に衝撃を受けるパルジファルに対して、「母の祝福の最後の挨拶／愛の最初の接吻」（PA, 109）と迫るクンドリーは、従って、聖母を偽装しているのである。第２幕では誘惑者であったクンドリーは、最終幕では、「改悛した罪の女」として、パルジファルに洗礼を受ける[27)]。マグダラのマリアの面影がそこにはある。

３）語り手グルネマンツ

叙事文学には物語を制御する語り手がいる。クレチアンでは、前述の様に、登場人物の名前さえ、なかなか読者（聞き手）に教えてくれない。ヴォルフラムでは、諧謔に満ちた語りで読者の意識を揺さぶる。劇文学では、舞台上で実際の行為が展開されるのが基本ではあるが、ギリシア悲劇にすでに「使者の報告」という演劇的な手段によって、過去の出来事などを「報告」という形で内容に組み入れることが行われていた。

『パルジファル』のグルネマンツは、出来事の当事者というよりも観察者であり、報告者である。第１幕では小姓に聖杯の由来を聞かせるし、第３幕ではパルジファルに現在の聖杯城の状況について知らせる。同時にグルネマンツは、パルジファルを相手に、第１幕では名前を聞き、第３幕では聖槍奪還とその後の遍歴について聞き手となる。叙事的な長い語りは、『ヴァルキューレ』第２幕のヴォータンの独白などで、すでにヴァーグナーが楽劇の手法として導入している。人物設定としては、第３巻のグルネマンツと第９巻のトレフリ

26）ヴォルフラムに新約聖書的な表象がないわけではない。パルチヴァールがジグーネに初めて会った時、死んだ婚約者を膝の上に抱いて嘆き悲しんでいる（WP, 138）のは、典型的な「ピエタ」の構図（一般化するのは14世紀以降）である。

27）『パルチヴァール』第16巻で、フェイレフィースが「洗礼」を受ける（WP, 808）場面があるが、作品構成上の意味は大きく異なる。それに対して、同じく最終巻で描かれる、恋人の棺の傍らで冷たくなっているジグーネ（WP, 804）の姿は、楽劇の最後で「パルジファルを見上げながら、その足下の床にゆっくりと倒れて息絶える」（PA, 157）クンドリーに重なるところがある。

ツェントを合体させた『パルジファル』のグルネマンツは、こうした叙事的な語り手の役割を与えられているのである。この語りによって、前史的な部分を劇中に取り込んで、場面の数を減らし、構成の簡素化が実現している。

4）敵対者の設定

ヴォルフラムの場合には、パルチヴァールもガーヴァーンもそれぞれ数多くの戦いを繰り広げるが、全編を貫く絶対的な敵対者はいない。例えば、「魔法の城」の主クリンショルは、魔法でガーヴァーンを悩ませはするものの、直接対峙する訳ではない。クリンショルは、シチリア王妃との密通を咎められて去勢されたことから、世間に対する復讐のために魔法を修得し、四人の女王達を捕らえ、ガーヴァーンは、女王達の救出に向かったという経緯は確かにある。しかしこの魔術師については、「礼節をわきまえ、賢い」（WP, 618）し、「約束は違えない」（WP, 659）などとも語られており、単なる悪役ではない。

黒魔術に対して戦うパルジファルは、ヴォルフラムでのガーヴァーンの位置に置かれているが、その武器は剣や盾ではなく、信仰であり、信仰によって力を得る聖遺物である。クリングゾルが聖杯城に対抗しようとする武器は、花の乙女達による誘惑なのである。騎士道による騎馬試合は、宗教的な正邪の戦いに姿を変えている。

『パルジファル』における二元的な対立は、『ニーベルングの指環』におけるヴォータンとアルベリヒを想起させる。『パルチヴァール』では、アンフォルタスは、ある異教徒との戦いで、相手の毒を塗った槍で刺されたのだが、その相手を倒している（WP, 479）のであり、アンフォルタスを傷つけた槍と聖杯城の血の滴る槍（WP, 231）との関係はテクストでは明言されていない。ヴァーグナーは、本来別の人物と出来事を関連付け、クリングゾルを、クンドリーを使って聖杯城を脅かす悪の魔術師に仕立て上げる。

アンフォルタスの傷の位置が、股間から脇腹へと変更されたことにより、キリストの受難が連想されることになる。また、第２幕の最後で、聖なる槍で十字を切ることによって、クリングゾルの魔法を封じるのも、キリスト教的な主

題を強調する一手段である。そもそも、第１幕の後半は、「舞台上で執り行われる教会の典礼」に限りなく近づいている。

５．終わりに

原典となった中世文学においては、少年から壮年に至る長期に及ぶ人間の成長の諸段階が描かれている。経験の乏しい少年が、年長者から教えを受け、教えを形式的にしか理解していないために、様々な錯誤を犯す。次の教えを受けることによって、次第に人間として成熟してゆく過程で、罪を自覚し、責任ある行動によって、聖杯城の主となる資格を得る。変化しない騎士ガーヴァーンを対蹠的存在として、パルチヴァールの苦悩が際立つ。

ヴァーグナーは、『パルチヴァール』の多彩な登場人物を大胆に整理し、二人の主人公のうち、ガーヴァーンをアンフォルタスと置き換える形で、悩める王とその救済者を対比的にドラマに組み込む。中世叙事詩では、教育を受けて、「問う」ことを学ぶのだが、楽劇では、クンドリーの接吻がパルジファルを直感的に悟りへ導き、アンフォルタスの苦悩を理解する形に変更されている。パルジファルが「共苦（Mitleid）」を得る場面が象徴的に示している様に、両者は内面的に繋がっており、表裏一体の関係にある。これは、第１幕ではアンフォルタスにアラビアのバルサムを届ける荒々しい女騎手、また第２幕ではクリングゾルに操られた妖艶な誘惑者、最終幕では改悛した罪の女という多面性を示すクンドリーの人物像と対応しているのである。

聖杯城への対立軸となるのが、クリングゾルとその魔法の園である。歌劇『タンホイザー』のヴェーヌスベルクの再現とも言えるその世界は、闇の中に浮かび上がる幻覚の産物であり、「無意識」を開放させるロマン主義的な空間である。この対立構造の可視化の方法が、対称性の原理に従って設定された三幕構成である。第１幕と第３幕が聖杯城の領域であるのに対し、第２幕がクリングゾルの支配する領土である。パルジファルの聖杯城への帰還によって、ドラマは完結する。ヴォルフラムの原作に、一つの極めて簡明な要約形を与えた

と言えるだろう。中世文学は、全くその姿を変え、19世紀の文化史的なコンテクストの中で、再構成されたのである。